

## 介護から見た在宅高齢者の排泄環境に関する研究

○番場 美恵子

竹田 喜美子

(昭和女大)

【目的】現在の高齢者介護は、在宅での自立支援をひとつの目標に掲げている。介護保険制度により、公共の介護サービスの充実が図られているが、介護をする家族の存在も甚大である。そのうち、排泄は人間の尊厳に関わる行為という理由からも自立支援の重要性が高く、家族介護の役割は大きい。本研究は、在宅で生活する要介護高齢者（対象者）の排泄環境の実態を把握するとともに、介護者を中心に排泄自立を促す要因を探求することを目的とする。

【方法】川崎市内において介護認定を受けている在宅高齢者を調査対象とし、介護者を主としたアンケート及びインタビュー、図面採集、写真撮影等の訪問調査を行った。対象住戸は21戸、調査時期は2000年9月である。

【結果】対象者は年齢62～90歳で後期高齢者が6割であった。一方介護者は年齢52～89歳で、介護者も高齢であるいわゆる老々介護の住戸が目立つ。性別は対象者・介護者ともに女性の方が多い。対象者の自立度は、生活自立、準寝たきり、寝たきりがほぼ同数であった。排泄行為を排尿昼・排尿夜・排便に分け、さらに排泄場所・介助度により分類すると、便所を利用すると回答した住戸が8割を超え、そのうち大半は何らかの介助を要するという結果になった。排泄自立を便所利用と介護の有無という2つの軸からみると、対象者の歩行能力による要因が強いが、介護状況や居住空間によっても左右される。介護状況では過剰介護や老々介護に排泄自立の低下がみられる。居住空間においては、便所までの距離と便所空間が重要で、とくに便所までの動線と便所の開口部の検討が必要である。